

児童健全育成賞（數納賞）佳 作

家族の再統合をめざして

岐阜県岐阜市
宗教法人天理教濃飛分教会 吉 福 多恵子

はじめに

平成15年、夫と何度も話し合い、難渋の中にいる子どもたちにとってぬくもりの居場所となるような里親家庭を目指したいと思い、里親登録をし、今年で14年目を迎えました。これまでに、11人の子どもとともに暮らしてきました。

今年（2017年）の全国里親会の総会の席で全国表彰を頂戴し、ますます、里親として、責任の重さを感じているところです。

最初はただ、自分にできる社会貢献は何かと考えて、親と共に暮らすという普通の幸せを与えてあげたいという思いから始めた里親でした。しかし、何人もの里子と接し、また一人一人違う生育歴と向き合いながら、この子たちの未来を考えたとき、私たち里親のところで今まで実親のところでは得られなかった安らいだ生活の保障と、見守られる幸せの中で暮らしているだけでは、ダメだと思うようになりました。我が家は養育里親です。制度からいけば、18才あるいは20才で自立するか、もし、条件が整えば、それまでにでも親元に帰るということもあるはずです。出来るならば、やはり親と一緒に暮らせる能够ができるように支援してあげたいものだと思いました。考えてみれば、この子たちがどうして里子として生活せねばならないか。問題は親にあることのほうが断然多いのです。

親にもう一度我が子と共に暮らしたいという健全な意識をもってもらうことに、私たちが、社会がもっと力を注がなければいけないと思いました。

キーパーソンは実親なのです。実親支援をすることによって、子どもたちが早く親元に帰ることができるのだと思いました。

更には、里親としての経験が重なって、多くの里親との交流もできるようになってくると、里親にしかわからない悩みを聞く機会が増えてきました。保護された子どもも、実親、里親の思いが交錯するなかで、時に里親は何処にも相談出来ない悩みに囚われてしまうことがあります。かつての自分が、悩みにおぼれてしまいそうになつた経験から、新しく里親として登録し、養育をはじめた里親に100パーセント寄り添つて、悩みを聞き、児童相談所との間を取り持つことも私のような立場でならできるのではないかと考えるようになりました。折しも、岐阜県では里親サポーターという事業が発足し、文字通り里親を支援する組織もでき、私もそのサポーターの一員に加えていただくことになりました。

現在、自立を目指した里子の養育、実親支援、里親支援、この3つを心において、里親生活をしているところです。

この度、児童健全育成賞（數納賞）という公募があるのを知りました。今までの自分を振り返り、これからに生かすために、応募すること

にしました。

お預かりした里子の事例を通して、様々な問題行動の根底にある里子の心を深く読み取り、里子たちにとって、最善の道筋を模索しながら、私自身が学び続け、里子たちの心の成長を引き出していくたいなと夢見ております。

稚拙な文章でありますが、私が学んだことを披瀝して、様々な観点からご意見がいただけたらありがたいと思います。

なお、個人情報保護の観点から、事例の本質に関わらない範囲で属性等の一部を変更しています。

初めてお預かりしたA子ちゃん

里親登録をして、随分日が経ち、こんなに来ないものなのだと諦めかけていたころ、打診がありました。

小学4年生。母親のパートナーからの虐待で、保護されました。初めて会ったA子ちゃんは、ふっくらした頬の可愛い子でした。

転校した小学校では、里子と接するのが初めてで、かなり戸惑いがあったことだと思います。児童相談所が中心となって、前居住地の民生委員、小学校の先生も交えて、小学校でケース会議を開いていただきました。受け入れの小学校からは、様々な質問が出され、不安も少しは解消されたのか、おかげで幸先よくスタートを切ることができました。3年生からクラス替えのない小学校で、すでに友達のグループががっちりできあがっている4年生途中での編入は、とても大変でしたが、元来、負けず嫌いの性格が幸いして、だんだんと友達との信頼関係も築けるようになり、勉強でも頑張ったのでクラスでも認められる存在になっていくことができたので、里親1年生の私もホッとしました。

さて、初めての委託であり、様々なエピソードがありますが、一番心に残っていることを書きたいと思います。

受託したときに、教科書などは捨てられてしまつたということで、学校で揃えていただきました。夏休みも過ぎ、2学期が始まりましたが、

ふとしたことから社会の副読本がないことに気づきました。「今までどうしていたの」と聞けば、「毎回忘れた」と、隣の子に見せてもらっていたそうです。「どうして私に言わなかったの」と何度も聞いても返事をしてくれません。

その夜、A子ちゃんの寝顔を見ながら考えました。

この子は、「これもお母さんが捨ててしまったの？」と、母が悪く言われるのが嫌で、母を護りたかったのではないかと思いました。何といじらしいことかと涙がこぼれました。今までどんな仕打ちを受けてきたことか。それでも子どもにとって、お母さんは世界一なんだと思いました。今までにも、一度もA子ちゃんの前で母親の悪口を言ったことはありません。しかし、このできごとから、私は心にしっかりと刻みました。

お母さんは世界一。どんなに里子が母親の悪口を言っても、大好きだからこそ悪口なんだ。この子どもの心を絶対つぶさないようにしていきたいと。

B子ちゃんの場合

5才の女の子でした。実の父親からの虐待で保護され、我が家に委託となりました。まだ若い両親で、親育てにも関わってほしいという児童相談所長からの依頼でした。

具体的には、B子ちゃんをお預かりして養育する。実親（両親）とB子ちゃんの姉は、毎週我が家に面会に来る。

虐待をした父親は、児童相談所での虐待防止プログラムを受講。また、自分から病院の精神科でのカウンセリングを受診することも決めて、皆がその心で一つとなって動き出しました。

我が家での生活ぶりは、とても大人しく素直な子でした。ちょうど1週間が過ぎた頃、朝起きた途端に、今まで聞いたことのないような大きな声で泣き出し、どうしたことかとびっくりしましたが、いろいろ考え方合わせて、実は、この子は今まで喜怒哀楽という感情を心に押し込めていたのではないかと思いました。父

親の前で、感情を出せず、どんなに苦しい思いで生活していたことでしょう。そう感じた私はB子ちゃんを自分も泣きながら抱きしめました。

その日を境に、B子ちゃんは様々な感情を表すことができるようになりました。泣くこと、笑うこと、怒ったりすねたり。今までの時間を取り戻すように、あっという間に普通の5才の女の子になりました。

毎週、両親と姉は欠かすことなく面会にきました。家族で食卓を囲み、4人でお風呂に入つて、楽しい時間を過ごして帰って行きます。

B子ちゃんは最初のうちは、両親を見送れば、テレビに直行。見たい番組に見入っていました。しかし、だんだんと虐待をした父が怖くないと感じていきます。両親を見送りながら、自分と一緒に帰りたい。靴を履きたいと思うのです。たった5才の子どもが気持ちをかみ殺し、両親の後ろ姿を見送りながら肩をふるわせている姿に胸が締め付けられました。その上、この子は言います。「ここで見るお父さんは怖くないけれど、家に帰ったらまた殴られる」

まさかそんなことを考えているとは・・・。虐待とはほどほど恐ろしいものだと思いました。

一方の父親は、虐待防止プログラムも受講し、自分のしてしまったことに対する後悔も深く、懸命に努力していることがうかがえました。これならきっと早くに親元へと返すことができるだろうと思っていましたが、私には一つ、気にかかることがありました。それは、母親です。母親は、B子ちゃんへの愛情も深く、二人の関係は良好だと感じました。しかし、それゆえに自分は何も悪くないのに、夫が虐待をしたばかりに、こうして娘が里親に預けられているということに納得できなかったのです。私は、両親が面会に来る度に、母親に、夫婦仲良くすることが、子どもたちにとってどんなに幸せなことを話し続けました。何度も話をしますが、どうも彼女の心に届かないのが気がかりでした。あるとき、母親の生育歴の話になり、彼女自身が育ちの中で父親との関係がうまくいかず辛い

思いをしていましたことを知りました。このままいけば、可愛い娘も父親との関係が悪く、二人の間で母親として辛い思いをするのではないかと思ったとき、母親に変わつてもらいたいと強く思いました。思いが通じたのか、「これまで虐待をしたのは夫で自分は何も悪くないと思っていた。しかし、夫が帰ってきてでも知らん顔でテレビを見ている子どもたちに、疲れて帰ってきた夫が腹をたてたのも無理はありません。それよりも、私が、子どもたちに注意をしていればこんなことは起きなかつたのかも知れません。これからは、夫婦が仲良くして、二人三脚で子育てをしていきたいです」。こんなメールを送ってくれました。何年かかるだろうと言われていた委託でしたが、両親の努力で思った以上に早く措置解除にこぎ着けることができました。

この家族は、措置解除後も家族揃って暮れのおもちつきや新年会に来てくれます。父親が「実家みたいな気がする」と言ってくれたのがとても嬉しかったです。

B子ちゃんが中学生の頃、母親に聞いたそうです。「どうしていつも親戚でもないのに吉福さん宅に遊びに行くの？」母親は5才の頃の話をしたそうですが、全く覚えていなかつたとか。これでいいのですね。幸せの証拠だと、喜んでいます。

B子ちゃんの委託を通して、実親支援がどれほど大切かを知りました。更には、里子に来る子どもたちの親は、往々にして若年であることが多く、ちょうど私たち夫婦にとってみれば息子や娘の年頃です。措置中も、措置解除後も、親自身が我が家を実家だと思って交流をもてるような関係を築けたらいいなと思いました。

C子ちゃんとD子ちゃんの場合

小学校低学年の姉妹でした。母親のネグレクトで保護されました。

母親は夜の職業で、当時父親違いの弟が生まれたばかりでした。本当なら、深夜も預かる保育園にいなければ働くことができません。し

かし、高額でもあるし、C子ちゃんとD子ちゃんに赤ちゃんのお世話をさせて、仕事に出ていたのです。学校で眠ってしまったり、季節にそぐわない服を着ていたりで判断し、民生委員がたずねていったりして、ようやく保護に至った例でした。

何とも愛くるしい二人でしたが、聞いてみると、本当に過酷な毎日であったことがわかりました。それでもくつなく笑ってくれることが救いでした。

初めて里親宅で迎えたお正月。児童相談所で母親とは何度か面会していましたが、我が家に母親が来てくれることはこれが最初でした。二人は舞い上がるほど嬉しくて、母親にまとわりついで、離れようとしません。やがて、時間も過ぎ、母親が帰ることになりました。「ママ、C子ちゃんとD子ちゃんがママのことずっと覚えていられるように、ぎゅっとしてあげて」と頼んだのですが、母親には、どういうことか分からなかつたようで、小さい弟を抱いたままでした。しごれを切らした私は、赤ちゃんを取り上げ、傍にいた人に託し、C子ちゃんとD子ちゃんをしっかり母親に抱かせて、その後ろからぎゅつぎゅつと私が抱きしめて、こうやってやるんだよと教えたのです。周りにいた人はみんな泣いています。でも、母親は、自分の感情を出すことができなかつたようでした。母親が帰った夜、二人の対応があまりにも違いすぎて驚きました。姉は、悲しさを忘れようとするかのように、一心にボールについてケラケラと笑っていました。妹は、もらったぬいぐるみを抱きしめて、泣いて泣いて泣き疲れるまで泣いていました。今、思い出しても辛い夜でした。

この子たちは、今いる里子を除けば、一番長く受託した子どもたちです。社会規範も全く知らずに来て、やんちゃもしました。お金を盗んだり、部屋でゴミ箱を燃やすなど、かなり危ないこともあります。恥ずかしながら、随分怒つたりもしました。しかし、私にもう少し養育技術があれば、あんなに怒らなくてもよかつたのに反省しています。ちょうどその頃、コモン

センスペアレンティングに出会い、勉強することにしました。怒ったり怒鳴ったりせず、子どもをよい方向に導く子育て技術が、里親の養育には絶対に必要だと強く思いました。現在、里親会の行事でも子育て支援の一貫として、私の学んだことをお伝えしています。最近は、里父さんの参加も多くなってきています。メモを取つて聞いてくださる姿に、私が戸惑った道も迷わずに、遠道したところも一直線に進んでもらえるよう、精一杯力を尽くしたいと思っています。

子どもらの母親は、里親家庭で子どもたちが育つ様に、自分を卑下しているところがあり、上手く関係をはかることができずにいました。面会に来た母親と話をして、彼女の身の上話に耳を傾けていると、幼い頃から両親とうまくいかず、思春期には耐えきれずに家を飛び出したこと也有つたそうです。そんな話を聞いて、心から「大変だったね」という労いの言葉が口をつきました。

およそ里親として実親と相対するとき、実親の方には、どうしても弱みのようなものが付きまとつ感じます。里親も、実親の態度に、なんという親なのだという意識が湧いてしまうことがあります。しかし、実は子どもだけではなく、その実親も同じように虐待を受けたりして、辛い過去を引きずっていることがあるのです。そんな実親の心に寄り添う里親でありたい。例え、今の姿はどうしようもないと思えても、その根底に実親が抱えているものに思いを馳せたいと思いました。子育てには、里親、実親、それぞれが社会資源として協力し合うことが必要だと思いました。

さて、この子らを家庭復帰させるにあたり、いろいろな問題がありました。そこで、家庭復帰の準備を進める中で、週末は家に帰り、母親と協力して家事をしたり、自分のことは自分でできるように実習をすることになりました。里親家庭でしていたことを忘れないように、また、時間の観念、お金の価値観なども培われるようになると、毎回実親家庭での様子が分かるように、記録してくるようにとの課題を課しました。名

付けて「C子とD子のドリームプロジェクト」二人のファイルが一杯にたまつた頃、委託解除がなされました。

目標を掲げ、目標に向かって具体的に何をどう変えていけばよいのかを考え、行動できるよう、この「ドリームプロジェクト」が果たした役割は大きかったと思います。

現在、我が家では、月初めに全員が予定をすりあわせるために、予定表に自分の予定を書き出すようにしています。それと同時に、一人一人が目標を決めて張り出し、それに向かって1ヶ月を頑張るようにしています。家族全員の目標は、結構面白いものもあって、みんなが話題にしながら、意識して過ごすことができています。こうしたことでも、だんだんと学び取ったことで、効果が上がったことは、継続して習慣にするよう努力しています。

E子ちゃんの場合

E子ちゃんは、高校3年生の後半になって委託されました。実親に精神疾患があり、一緒に暮らすことが難しいとのことから、委託されました。大学進学を目指しており、とにかくよく勉強しました。

この子の養育で学んだことは、里子の自立についてです。たまたま、祖父母も健在で、学費の心配はいりませんでしたが、遠いところでの寮生活。お金が必要とのことで、インターネットを使って、探せるだけの奨学金を見つけました。返還の必要があるのは、社会に出てからもずっと返し続けなければなりません。それでなくともバックボーンのない里子は、できれば、返さずともよい奨学金をと、たくさんの書類を書きましたが、おかげですべて合格。大学生活は、アルバイトもしなくてよいのではというぐらいでした。残念ながら、この子は大学在学中から疎遠になり、今どうしているのかは分かりません。里子の中には、解除後、消息が分からなくなる子もいます。今頃どうしているのだろうと思うと、自分の養育はこれでよかつたのかと、自信が持てず、辛い思いになります。

落ち込むこともあります、それをばねにしながら、また次の養育に力を注ぎたいと思っています。

また、E子ちゃん以降にも、高校卒業後、就職して自立した子もいましたが、彼女はとにかく高校時代から将来を考えてアルバイトで貯金することにも頑張っていました。専門職の高校でもあったことから、将来の職種も絞ることで就職先も順調に決まりました。運転免許も取得し、アパートの一人暮らし。月に2、3回は我が家に顔を出し、ご飯を食べていってくれます。「ただいま」と帰ってきてくれるのが、何よりうれしいです。

Fくんの場合

我が家は女の子を養育することにしています。それは、両方だと部屋の関係などがあり、大変だからです。

また、94歳の母がいることも、やはり大きな男の子では、何かあったときに困るからという気持ちもありました。

ただ、1度だけ男の子の養育をしました。

1歳9ヶ月の男の子でした。母親が夫からのDVを逃れてきて、保護された事例でした。母親が非常に若く、これから的生活を思うと、実家に帰ることを勧めましたが実現せず、経済基盤を整えるまで子どもを預かることになりました。突然母親と離されたFくん。いつお母さんが帰ってくるのだろうと、ずっと窓際で外を見つめているようですが、いじらしく思えました。2歳にも満たない子どもを抱えて住み込みで働くようなところは容易にあるものではありません。少し長い養育になるかもしれないと思っていた。ところが、働く準備段階として健康診断を受けたところ、異常が見つかりました。また、Fくんは少し発達に遅れがあるとの診断を受けました。母親は自分一人で子どもを育てていくことは出来ないと判断したのでしょう。自分の父親に頭を下げて、実家に帰ることを決めたのです。わずか2ヶ月の養育でした。

この子の養育で感じたことは、Fくんの発達

に問題があるとされたことについて、聞いたときから「そんなことはないだろう」と思いました。小さい時から母親の適切な導きができるとなつただけなのです。名前を呼ばれたらハイと返事をするのも、階段をぴょんと飛び降りるのも、あつという間に出来ました。あれもこれも出来ないと言うのは簡単です。子どもの能力が少し遅くとも、早くても、引き出せるものもあると思います。もちろん、障害を早期に見つけることも必要です。どちらにしろ、子どもをしっかり見るということが大事なのではないでしょうか。

1歳9ヶ月からたった2ヶ月しかいなかつたのに、今年の3月、母親から電話をもらいました。無事に幼稚園を卒園したこと。小学校に入学すること。ずっと行けなかつたけれど、お札のご挨拶がしたいとのことでした。おじいちゃん、おばあちゃん、お母さんとFくんが揃ってってくれました。たくさんの大人に見守られ、落ち着いた少年に育っている様子を見て取れました。以来、小学生になったFくんと母親は時々遊びに来てくれます。

母親とともにFくんの成長を見守ることができるこの幸せをかみしめています。

里親支援のこと (里親センターとして)

「はじめに」のところで書いたように、私は現在、岐阜県の里親センターとして活動しています。具体的には、里親支援専門相談員と連携して、養育中の里親宅を巡回し、話を聞いたり、アドバイスをしたりしています。また、里親同士の繋がりから、聞こえてくる情報をもとに、こちらからアプローチして、相談にのつたりもしています。定期的に児童相談所、里親支援専門相談員、里親センターが集まって、情報を共有し、里親の支援をしたり、未委託里親にも面会しながら、モチベーションが下がらないように努力しています。

そんな中でのことですが、母親の産後うつから委託となった赤ちゃん。預かってくださった

のは、実子を育て中の里親さんでした。

赤ちゃんの育てについては、経験もあり何ら問題はなかったのですが、実親との定期的な面会(月3、4回)は、かなり里親には重い負担がありました。面会のたびに里親が仕事を調整したりして付き添ってくださったので、その労力も大変なことだったと思います。実母の病状もなかなか回復せず、お互いの意志の疎通が難しく感じられたことも当然あったと思います。児童相談所の立ち位置から考えれば、やはり実親の子どもを育てるモチベーションを下げないためにも、度重なる面会が必要と考えられたことも理解はできます。しかし、みんなの気持ちをどこで折り合わせるかは、とても難しい問題です。児童相談所から、里親へ働きかけてほしいと依頼を受けましたが、私はどんなことがあっても里親の気持ちを汲むサポートーという位置づけからはずれる訳にはいかないと思いました。自分が里親になってはじめの頃に一番悩んだことは、誰が私たち里親のことを十分分かって、支援してくれるのだろうかという疑問でした。時の児童相談所に、この疑問をぶつけたときに、「もちろん、児童相談所に相談してください」と言われましたが、それは無理があると思いました。児童相談所はあくまで里子に軸足を置く立場。実親のことも加味しなくてはなりません。里親ならではの悩みを聞いてくれる人が別にいてほしいとずつと思っていたのです。里親センターという立場は、いつもそういう里親の味方でなければならないと思いました。とはいっても、私はなにもアンチ児童相談所ではありません。意見がかみ合わないといって、それで投げ出すのではなく、どうにかしてお互いに歩み寄り、赤ちゃんも、実親も、里親もみんなが喜べる未来に向かって、何ができるのかを考えようと思いました。

里子に関わる私たちは、みんな社会資源です。実親も、里親も、児童相談所も、里親支援専門相談員も、まだまだ他にもありますね。みんなが成長していくことが大事だと思いました。自分の立ち位置に固執せず、育ち合うことです。

若い児童福祉司もさまざまな経験を重ねて立派な児童福祉司になってもらいたい。実親も、里親もそうなんです。たとえマイナスの出来事がおこってきても、それをどうやつたらプラスに変えていけるのだろうか。みんなで考えたら、絶対に答えは見つかることでしょう。

私は、里親サポーターにならせてもらって、本当によかったです。これからも、里親同士の繋がりを、太くして、こぼれ落ちる子どもたちのセーフティネットになれるよう、頑張っていきたいなと思っています。

終わりに

これまで11人の里子と暮らし、様々な失敗も重ねてきました。里子たちにとって、最善の養育が出来たかと言えば、足りない所だらけです。

子どもたちは、それぞれに私に課題を与えてくれました。その課題に向き合う苦しい日々もありましたが、その苦しみがあったからこそ、大きな喜びがあり、今の私があります。

最近、同居する長男夫婦も里親資格を取りました。

これからがますます楽しみです。

毎年暮れにお餅つきをします。里親の仲間や、我が家の中の里子卒業生も来てくれます。

また、里子たちは、初めて我が家でお正月を迎えたときに、集まった人たちの前で、我が家のお家として紹介されます。

おかげで、家族は毎年増える一方です。何とうれしいことでしょう。いろんな悩みを持ってやってくる子どもたちが、いつまでもわが子であると感じられること。14年前から始まった里親生活は、私に活力を与えてくれます。まだまだ元気で、この子たちや、その親と関わり続けていきたいと願っています。